取材ノート112. 晩秋のドナウ川

昨（平成16＝2004）年までに、札幌市と熊本市の間で、のべ25回、個展を開いたので、作品を総括する画集を作ろうと思いついたのは、今年の七月頃だった。しかし、下手な絵ばかり並べても、見飽きるに違いない。それなら、家屋の耐震工事みたいに、文章で補強してみてはどうだろう。また、自分の信条や、描いた様子も書けば回想録となり、この世での痕跡にもなるかもしれない。そう考えた。そこで、ハンガリーの首都ブダペストは右岸の丘で、ドナウ川に架かる鎖橋と、左岸ペストの市街を描いた作品に、減り張りをつけてみたら、もう一度、東欧を訪ねたくなってきた。

平成17（2005）年11月9日（水）晴。成田空港を15時に離陸したスカンジェナビア航空機は、太平洋に沿う本州の上空を北上して、稚内の南で日本海を横断した。日本との時差が8時間あるデンマークは、午前7時頃。11時間でコペンハーゲン空港に着けば、現地時間で18時。そこで乗り継ぎ、22時15分にブダペスト空港へ到着する予定。西に沈む太陽を追いかけるジェット機は、シベリアの上空11800mを水平飛行して、ウラル山脈の北限からヨーロッパ圏に入った。時差ボケの防止に、音楽随筆集『シューベルトからリストまで』を窓際の座席で読み、眠いのを我慢した。「優雅な東欧とドイツ周遊10日間」と題した、阪急交通社ツアーに参加した人数は、応募限度の35名。往復を機内で一泊するから、東欧での宿泊は8日だけ。晩秋の景色が楽しめそうだ。到着までの長い疲れを、首都のホテル「ブダペスト・メルキュール・ブダ」の柔らかいベットが、全部、吸い取ってくれた。

11月10日（木）晴。朝食後、ドナウ川を見下ろす「漁夫の砦」まで、観光バスで上る。「丘のブダ。水のヴェネッア。平野のフェレンッエ」は、ヨーロッパが誇る景観なのに、今朝は川霧が濃く、左岸西の国会議事堂、中央のイシュトヴァーン教会、東の鎖橋という絢爛豪華な配列は、上半身しか見えない。期待していた景色なのに、残念。側のマーチャーシュ教会に入って、重厚なステンドグラスを仰ぎ見る。文字が読めぬ昔の人への説教には、聖書の場面を描いたステンドグラスを使うため、各教会とも飾りつけに力を入れた。これまでの三回は、ドナウ川越しに左岸をスケッチしてきたから、初めて見る教会の内部。オーストリアの支配を受けたハンガリーは、ハプスブルグ家に根強い反感を抱いていたが、フランツ・ヨーゼフ皇帝（1830~1916）の后で、美貌のエリザベート（1837~1898）が例外なのは、親しみをこめて度々訪れていたからだ。等身大の大理石像が二階に陳列してある。この大理石像を眺めると、気高さが溢れている。1889年1月30日に、17歳の男爵令嬢マリー・ヴェッツェラとピストル自殺をした、30歳の皇太子ルドルフ。皇后は葬儀の深夜に侍女を伴い、遺体を収めた鉄の柩を安置する、暗く凍えるカプチーノ寺院の地下室でロウソクを灯し、「ルドルフ！ルドルフ！」と、愛児の死を悲しんで叫び続けた泣き声は、暗い闇の中にこだまして百鬼迫る情景だったと、侍女は伝えたという。遺体を鉄の柩に収めて安置するハプスブルグ家の霊廟は、ウイーンの中心街、カプチーノ寺院の広大な地下にあり、妻と訪ねたことがある。僧が纏うマントの色がコーヒー名となる。東大卒後、ウイーン大法学部で学び、毎日新聞東欧支局長を歴任した、塚本哲也著『エリザベート』（文芸春秋社）は読んできたが、ブダペストでの女性添乗員で、日本語の洒落まで巧いアニコウさんによれば、皇帝と皇太子の決定的な決裂は、ハンガリーを独立させて、皇帝になろうとする皇太子の謀反が露見して、死刑の判決が下る前に、覚悟の自殺をしたのだという。

ところで、ヨーロッパでは珍しい温泉が、ブダペスト市内には数多くある。それを体験するため、男性は海水パンツ、女性は海水着を持参した。忘れた妻は、成田空港の売店で買ってきた。中でも、有名な「ゲレルト温泉」はドナウ川の右岸にあり、王宮と見間違うような豪華な建物。爽やかな添乗員の小倉さんが、女性たちを一階の着替え室へ案内し、ガリバー旅行社の日本人、峯田氏に案内された私たちは、二階で着替えて、25m6レーンのプール（摂氏16度）に浸かった。数年前までは、夏になると海で必ず泳いだのに、最近は疎遠だ。それが、ブダペストで泳げるだなんて！平泳ぎで二往復し、温泉に入って暖まる。「こうなると、ドナウ川（130mほどの川幅か)を横断したくなってきたよ」は、私の冗談。一方は腹の深さだが、奥は2mまで底が傾斜している。市民は、皆、黙って泳ぐ。ツアーの一人は、椅子に置いた新しいバスタオルを、誰かに失敬された。当市で7年目だという、千葉県柏市出身の峯田氏が、「月3万円も払えば、マシなマンションが借りられる」と、教えてくれた。そこで、「描きに来る時は、よろしく」と、頼んでおいた。五年前の夏、一週間単位で三回借りた、スイスでのシャーレ（貸し別荘）の楽しさが、瞼をよぎった。

泳いだので、レストランの昼食が美味しい。食後は自由時間。オプションツアーの私たち十数名は、ブダペストの北西70キロにある、旧都エステルゴムまで観光バスで行く。首都を離れると、進行右手に広大な墓地。今が丁度、日本でいうお盆らしく、どの墓石にも菊の花が飾ってある。ハンガリーは土葬が多く、花泥棒を防ぐセキュリテイ会社が、墓地を警戒しているそうだ。スズキ自動車の製造工場の近くを通り、90分後にハンガリーカトリックの総本山、エステルゴム大聖堂へ着く。巨大なドームが空に聳え、人影がない聖堂の内部には静寂が漂う。バッハのミサ曲のCDを、妻が記念に買う。ドナウ右岸を流れに沿って東へ進み、南へ直角に曲がる地点が、ドナウベントのビシェグラード。スラブ語で、ビシェグは高い、ラードは場所のこと。高地を意味し、右岸の山の頂に、ローマ時代に建てた城壁の跡が聳え、旗が立っていた。あの城なら、90度に折れるドナウ川は、彼方まで両端が見えるから、怪しい船は、全部、検問できただろう。ところで、イタリア半島の西、アドリア海に面したモンテネグロ。その北部を北へ流れるドリナ川も、ユーゴの首都ベオグラードでドナウ川に合流する。最近、『ドリナの橋』という東欧文学の名書を読んだが、小説の舞台は、流域ビシェグラードの町にある橋の、劇的な物語だった。さて、大聖堂から40キロ下流の町、センテンドレに到着。美術館が15以上もある落ち着いた街で、年間100万人が訪れるそうだ。ここで、女性陶芸家、コバーチ・マルギットの作品を展示する、美術館を見学した。表情はかなり素朴だが、語りかけてくるような仕草の塑像に、思わず、乗りだしたくなる親近感を抱く、不思議な作品ばかりだった。大きな上弦の月が丘から上り、青白い光を柔らかく投げかける。もう一度訪ねたいと思う、この町と別れた。

夕食は有名なハンガリアングヤーシュを愛で、食後、右岸の鎖橋の袂から、チャーター船で夜のドナウクルーズ。前回は晩春で薄暮だったが、今回は晩秋の暗闇。だが、ドナウの宝石と称する鎖橋の見事な照明、王宮や国会議事堂、ゲレルート丘の塑像など、札幌の雪祭みたいに、建物の照明がドナウのゆるやかな水面に映えるため、感動が沈黙を誘う。この華麗な夜景の60年前には、ベルリンを目指すソ連軍が、ドイツ側だったハンガリーを制圧して、殺戮や略奪、暴行や強姦を、ほしいままにした史実が隠れている。その後の、冷戦と鉄のカーテン。1956年11月3日から始まるブダペストの悲劇は、ここでは伏せよう。

11月11日（金）晴。朝食後、観光バスでウイーンへ出発。240キロを4時間半で走る予定。高速道路が次第に空いてくる。本来は狩猟民族のマジャール人だが、スラブ人を真似して農耕民族になる。収穫したトウモロコシの幹が枯れた畑が、彼方までうねる大地。道路の下に通路を作り、野生動物を自由に往来させていると、前回聞いた。ハンガリーは70%がヒマワリ油を使うが、国境付近では黄色い菜の花畑が目立つ。国境で、パスポートに判を押してもらう。トランクとボンネットを開け、数人の国境警備隊員に乗用車が調べられている。隠した品物が次々に見つかり、車の屋根に積み上げられるのを、停車中のバスの窓から興味深く見守った。西に向かうほど裕福になると聞いた通り、オーストリアに入ると、風力発電用の高いプロペラ塔が目立ち、200本は見えただろう。ウイーン市内へ入って、ドナウ運河に沿って走る。前回、付近をスケッチして歩いた12月を、懐かしく思いだす。昼食はウイーンナーシュニッツェル。野菜が豊富で、ビールは、毎回美味い。鷹揚な店主は、集金する飲み物代の端数をまけてくれる。こんなのは初めて。シェーンブルン宮殿と、新宮殿の王室宝物館にある、「シシイ博物館」を見学した。シシイとは、昨日見た、あの大理石の皇后のこと。バイエルン王国のヴィツテルスバッファ公爵家に生まれて、型破りの父親に感化され、野性味豊かな娘に育つ。姉のヘレーナについて皇帝に会いに行ったばかりに、見染められて結婚し、皇后になった。型にはめたがる皇母ゾフィーを嫌って、皇母が軽蔑するハンガリーに味方した。対プロイゼン戦役では、病院に傷病兵を慰問し続けるなど、民衆から圧倒的な支持を受ける。数多い皇后の遺品を展示していた。前々回に泊まったアナナスホテルへ着いて、休憩後、ますのグリルを食べにバスで行く。

11月12日（土）曇。終日、自由行動。だが、日本と違い、迷うと時間がアッという間に過ぎ去るから、高さ252mのドナウタワーで昼食をとる、優雅な休日観光オプションツアーに、朝から参加した。最初は聖シュテファン大寺院の内部を見学。ところで、新約聖書の使徒行伝第6章には、「ステパノは恩恵と能力に満ち、民の中に大いなる不思議と徴とを行へり」とある。しかし、讒言によって町から追われて、石を投げつけられて死ぬ。このステパノを祀るのがシュテファン大寺院で、殺害に協力した青年サウロに、人々は上着を預けて石を投げに行った。ところが、ダマスコへ向かうサウロは目が見えなくなり、改心して熱烈な伝導者に変身する。このパウロの精力的な宣教活動が、ローマ帝国にキリスト教を広めた原動力になったのだ。次に、国立美術史博物館へ行く。一日いても見足りない名画が、ヨーロッパの地域別に分類されて、展示してある。ガイドの斎藤氏は、ウイーン大造形学科を卒業していて、一般ガイドと一味は違う、鋭い解説で私たちを釘づけにした。一方、ドナウタワーの展望も見事だった。360度に回転するレストラン。一人で行くのは難しい。ウイーン市庁舎前で観光バスを降りて、楽しいクリスマスマーケットを見歩き、地下鉄を乗り継いでホテルへ戻り、19時にオペラへのバスが出るまで、部屋で休憩した。

20時丁度に、広い円形観客席の照明が弱まり、ウイーン国立歌劇場の煌々とした舞台で、歌劇が開幕した。舞台下で、約120人のウイーンフィルハーモニー楽団を指揮するのは、小沢征二氏。「ヴォツェック」という歌劇で、日本語の解説書を予め読んできたが、前の椅子の背もたれの小さな画面に、ドイツ語と英語でセリフが現れる。本場の劇場で、最高の指揮者による歌劇を含むツアーだから、35人も応募するわけだ。21時45分に閉幕して、アンコールに答えて6回も幕が上るのは、役者を持ち上げる、小沢氏の心意気なのだろう。